

妻が窓の外を見ていた。

「ねえ、雪が降っているのよ。積もるかしら？」

「積りゃしないだろう」

「会津の実家は、大雪かしらねー」

「どうだか・・・昔みたいには降らないと、言ってたがね・・・」

会津の冬は、今と違って深い雪に何もかも閉ざされていた。止めどなく降りしきる雪は、融けては又積りして黒い地面を見せることはなかった。山に囲われ、雪に覆われた盆地は、静まり返って冷たく夜も長い。夕方四時にもなると日が暮れて気温も景色も一変した。誰もが、白く冷たい世界に身を縮めながら、辛抱強く春を夢見ているしかなかった。

出窓を開け、鉛色にフワフワと落ちる雪を見上げていたら、あの頃の情景が蘇ってくる。

冬になると、居間のテレビ前に家族が集まって炬燵だけで寒さを凌ぐのだが、毛糸で編んだ帽子も被ったままで、厚手の上着や綿入れ半纏を着て過ごす。

それでも、吐く息は白く煙った。

「いい天気じゃったから、夜中は冷えんべなー。勉強もええが、風邪ひくでねえぞ」

「ストーブあつから、あの部屋はちつとも寒くねえ。勉強もはかどんべ」

「ええな、兄ちゃんは」

「んでも、換気しねえと、中毒になつから気いつけろよ」

皆、テレビも見飽きて早々に寢床へ逃げ込んでいくと、シンとした冬の寂しさが冷氣と共に漂ってくる。ざわめく木の葉も虫の声も、何もかもが雪に覆われるから、物音は何も聞こえない。静まり返った冷たい夜だ。

私の勉強部屋は、古い農家の二階屋根裏を改造した部屋だった。障子戸をガラス戸に替え鉄格子の手摺りも付けて、父が知り合いの大工に造らせた。その昔は蚕棚のあった造りだから、天井も低く変形した間取りで五畳分くらいはあったと思う。狭くて隙間風も入らないし、小さなストーブさえあれば充分暖かい。私の受験のために父が用意してくれた部屋だった。

家族が寝静まった夜、石油ストーブに灯油を入れるため納屋へ行った。真夜中なのにやけに明るくなった窓灯りに誘われて、雪の重みで固くなった玄関引き戸を開けて外を見た。東に見える磐梯山の頂きから月が出て輝いている。真冬に、月夜の晩は珍しく年に何度も

なかった。深く積もった雪が辺り一面を青白く明るくしていた。

夜がふけ、ストーブで温もった部屋で深夜のラジオ放送を低くつけながら勉強していると、南方の聞き慣れない音楽が流れることがあった。リズムカルな音は焼けるような日差しの中で弾んで、歌詞の意味はわからないが海に囲まれた南の小島を想起させる。暖かく豊饒な土地への讃歌なのだろう。鼓を打つ音や弦の音が弾けだすと、手拍子が起って、一人唄が始まって、二人三人と誘われながら追唱していく。灼熱の太陽の下で何度も口ずさむそのリズムは、豊饒な恵みに感謝する人々の悦びのようで、次第に陶醉しながら狂喜群舞する情景となって目に浮かんだ。

私は夢見るように、いつの間にか遠い南の島までたどり着いている。寄せては返すさざ波の音や、潮風でざわめくヤシの木陰で胸を高ぶらせている。長く反復するリズムが止んでも、唄の余韻が耳に響いて離れない。目に映る浜辺の群舞も終わろうとしなかった。

“ドサツ”

屋根の雪が落ちる大きな音で、ようやく私は冷たい雪の世界に戻された。部屋のカーテンを引いて結露で濡れたガラス戸を開け夜空を眺めると、月は高く上り煌々と異様に光っている。吐く息が大きく白く煙った。吹き込む冷たい空気には変りはないが、でも、どこか空気が甘くやさしく感じる。そして何故か、南の島の残り香がするのだ。

島人達もこの同じ月を見ているのだろうか。

雪に反射する冷たい月光と、水平線の彼方まで波を光らす月明かりと、放つ燐光に違いはないのだろうか。雪山の向こうに海があり、その海原の向こうに雪のない暖かな島がある。まったく違った環境の中で人が生きて、そのアナロジイに想いを寄せ、胸ときめかすものとは一体何だろう。陶醉するリズムが幻想を誘うのか。月から落ちたものが私に取り憑いたのか。それはわからない。しかし、それは独り飛び立とうとする始まりだったのかもしれない。突然に流れた島唄が、最も感受性が強い思春期のノスタルジーとなったのは確かだ。

東京に出て、大学に行つて、就職をして、今、定年を前にして埼玉に住んでいる。

「あなた、帰りは?」

「今日は、五十嵐と会うから夕食はいらないよ」

「あら、珍しい・五十嵐さん、お元気かしら」

「彼はもう四年前に退官して、市民大学の学生だとかいつて遊んでいるよ」

「へえー、市民大学ねえ。何を専攻しているの？」

「ひょうたんクラブだとか、ぶどう酒造りだとか言ってたなあ。どうせ、遊びさ」

「いいわよー。お金も掛からなそうだし、いい趣味よね。あなたも何か考えなくちゃ。もう三ヶ月もないでしょう？」

妻は着付け教室を自宅に開業して、水曜日の日二日間は生徒を集め定期に指導している。他に頼まれば土日でもやることがあって、私はどこかへ出掛けなければならなくなる。昔なら、土日もなく忙しく働いていたから感じることもなかったが、嘱託社員の身となつてからは帰りも早く、いささか身の置き所のないことが悩みの種となっていた。

夕方明るい時間に仕事を終え、神田駅近くの居酒屋に入った。

「おー、スーさん。久しぶりだなあ。元気してた？」

私は鈴木というから、大学時代の友人は「スーさん」と、私を呼んだ。

「ずい分混んでるなー、まだ、五時前だよ」

「周りを見てみるよ。退職組の暇つぶしさね。俺らも仲間入りということだ」

メニューを見ると驚くほど安い。彼がよく利用するチェーン店らしく、千円でべろべろに酔えるから、こうした居酒屋を「せんべろ」と、言うて笑った。変われば変わるものだ。

バブルの頃は、気取った洒落た店を自慢げに誘ったくせに、今はもっぱら、せんべろの常連だと笑っているのだ。

「なあ、スーさんも市民大学に来ないか？バカにできない面白さがあるよ」

「先にそう言われちゃ、バカにできないよ。でも、何でひょうたんなのよ。大学と言えば、もっともらしく聞こえるがね」

「追求する切り口が、たまたまひょうたんだったわけよ。何でも奥は深いのさ。細々説明はしないけど、広がりはあると思っただね」

「そんなもんかね・・・」

「なあ、無謀な一人旅もいいが、接点はある方が楽しいだろう。スーさんなら、わかるよなッ・・・」

五十嵐とは、大学夏休みに北海道一周旅行を計画した仲だ。

東京から札幌までは一緒に行った。二人の目的は利尻島の夜間登山を一緒にすることだ

ったが、東回りで行くか西回りで行くかを決めて、別々に、それも、電車バスを使わずにヒッチハイクするという、ゲームみたいな一人旅をしたのだ。利尻島に先に着いた者は三日だけ待つ約束をして、東西に別れてヒッチした。ヒッチハイクは一人の方が都合いい。トラックなら蟹ポーズをすれば五割がたは停まった。所謂、蟹族である。

私は東回りで利尻には近いから、日数を稼ごうと気儘な思い付きで、天売島と焼尻島に足を延ばした。

天売島は観光地ではない。唯一の島自慢は、鳥の島で、珍しい鳥の宝庫だと地元の人はいった。早速、島巡りをした。北東の高い岸壁に立つと、荒れる波が岩壁に当たってシブキを上げている。見下ろす先は鳴き声に乱舞する鳥と、荒波ばかりだ。上昇気流に波シブキが混じって、名も知らぬ鳥が吹き上がってくるのを見ていた。すると、だんだん鳥は大きくなって目の前を通過する時には、広げた羽が私の背丈程あったかもしれない。腰が引いて尻餅つくほど驚かされた。しかし、憧れた南の島とは違って寂しい島だった。

私のヒッチは順調で早々に稚内に着いた。翌日の船を予約して駅のベンチで野宿していると、見知らぬ人に声を掛けられた。

「どこから来た？・・・飯食ったか？」2つ3つ年配の男だった。

「飯は食ったといえば、食ったようだし・・・」

私は東京から来て、ヒッチで北海道を旅していると話した。確かに、ろくなものは食ってはいない。貧乏学生の一人旅だった。

男は船乗りだと言葉少なく説明し、うまい物を食わせるからついて来いと言って近くの寿司屋に入った。カウンターの端に木の切り株のようなものがあって、何かと聞いたら、観光客用に飾り付けたマグロのブツ切りだと言った。その時見た輪切りのブツ切りは、今でも最大なもので忘れたことはない。それからは珍しい魚介類ばかりを、値段も知らぬまま食べるだけ食べ、飲めるだけ飲ましてもらった。

翌日朝四時頃、叩き起こされた場所は船乗りの家だった。そして、すぐに船で出るから用意しろと言うのだ。

「えッ、どこへ？・・・」

「決まってるっしょっ、利尻だべな」

私の計画は酔いに任せて話していたらしく、良くご存知で、自分もついでの用事があるから漁船で島へ行くのだと言った。

「昨日話したべや、お前が泊まるユースホステルの経営者も知り合いだし、俺の本家は

利尻の牧場主だっちゃ、酒酔って忘れたがー？」

「はあ、そうでした、か・・・」

北海道ヒッチ一人旅はトラック運転手の方からもご馳走になって、いろんな人に親切にされ迷惑も掛けたが、船乗りのKさんとはお札の手紙から四十年に亘り今でも家族がらみで交流が続いている。毎年冷凍スルメイカを箱ごと送ってくれるのもKさんだった。

二日目の利尻ユースに五十嵐が到着した。やはり、西回りは難儀したらしい。早速の情報交換となった。

「網走から先は走る車も少ないし、警戒するのか、停まってくれないのよ」

しかし、摩周湖や屈斜路湖や知床など、景色の美しさを聞けば、帰路にはその情報を生かして是非訪ねる場所だと思った。それに比べ、私の立ち寄った天売焼尻島以外は、皆、素通りしてしまった。特別な情報もないから、Kさんにご馳走になったり、漁船で利尻にきたことなど話して、お茶を濁した。

「なによ、それが一番うらやましいことじゃね。で、何喰った？」

「まあ、ウニは喰ったな。毛蟹、タラバ蟹、鮭イクラ、貝はいろいろ」

「いろいろじゃわかんねえよー」

本当は酒に酔って、何を食べたか良く憶えていなかったのだ。

せんべろ居酒屋は、二杯目頼む頃には超満員になった。

「我々全盛の頃とは、まったく違うね。今や残業はブラックだというし、政治がらみで魔女狩りだもんな」

「競争社会だったしね。忙しくないのが恥ずかしい時代だった」

「無謀な旅でも、北海道の旅は楽しかったよな。Kさんはどうしてる？」

「娘さんが、婿養子を取って漁船を継ぐことになったらしい」

「Kさんも、いよいよ楽隠居か。また東京へ遊びに来ないかな」

「そうでもないらしいよ。婿養子のやる気が感じられないとか、網の手入れを教えるも憶えないとか、こぼしていたからなー。それに漁師の楽隠居なんか、まだまだ先なんだろうね」

「Kさん男気あるけど、有り過ぎるのも何とやらで、婿いじめになってんじゃないの」

「まーね・・・」

「スーさん。また、Kさんところに行こうよ・・・あつ、ヒッチで行くか？もうすぐ退職だ

ろうが」

「爺さんのヒッチじゃ、誰も乗せてくれないよ。それに、若者だって乗せてもらえるかどうか・近頃は、怪しいもんだ」

「人情も、時代で変わったかな？」

彼は店を出るまで、市民大学に入るよう口説いていたが、並んで駅に向かう時、

『俺達、何してきたんだろう』と、ポツリと寂しげに言った。

就職してからの人生は、若い頃、雪山の向こうに夢見たものとは遠くかけ離れていた。毎日ただ忙しかっただけだ。競争社会に厳しい奮闘を迫られ追い立てられるように走ってきた。自覚も何もないままに、いつも何かに強要されていたように思う。また、それが普通だった。

街はブロックが積み上がる様に、その建物はどんどんと高く伸びて建ち並んでいく。道路工事、地下道の工事と毎日どこかで開拓が進んでいった。高架道も地下鉄も縦横無尽に巡り、交通機関の絶え間ない騒音と喧騒は、人々の声を掻き消してしまう。さつさと急いで通り過ぎて行く何十万という人達がいっても、声を掛けられることもない。自分の姿は誰にも映っていないかったのだ。魂のない巨大な建物、コンクリートで出来た重く冷たいアーチ。それを象徴するトラックや打ち下ろす杭の騒音、泡立つ虹色の油。汚い空気。

でも、『暮らしは楽に便利になったろう』と問われれば、そうかもしれない。しかし、そうでないかもしれない。ただ露骨な金権競争社会に、黙って従わざるを得なかったただだ。だから『何をしてきたのだろう』と問われても、何も答えられなかった。

せんべろから、京浜東北線に乗車したのは夜7時過ぎだった。座れはしないが電車内はそれほど混んでいなかった。武蔵野線に乗り換えれば4駅ほどで最寄りの駅に着く。上京して以来、ここに住まいを決めるまで8回ほど引越しを繰り返していた。それからどれほどの時間が過ぎて行ったのだろうか。普段は想像もしないことだが、昭和年号と西暦の計算もして繰り返し考えていた。

座席に座る人達のほとんどが、例外なくスマホ片手に忙しく指を動かしている。若い学生もいれば、サラリーマンもOLもいた。ゲームを楽しんでいるのか、何の不満をメールにしているのか。近頃では見慣れた光景だから珍しくもないと思っていた。が、その日は違った。『俺達、何をしてきたのだろう』と、考えていると、どうしても便利な世の中にな

つたとは思えないのだ。既に車内の若者達も何かに埋没して忙殺されている。

五十嵐は無謀な一人旅が面白かったと言った。

自分の意思が反映して、否、反映しなくとも出会う自然や人とのふれあいがあった。Kさんとの親愛関係も一瞬のふれあいから長い付き合いになっているし、サラリーマン時代にはまったくなかった。五十嵐が投げ掛けたつぶやきは、大事なことだ。過ぎ去ったことで、確かに答えは出ないもどかしさはあるが蔑ろにできない問い掛けだった。

「あなた、今日が最後のお勤めね。ご苦労様でした」

「何だよ、あらたまると、気持ち悪いよ」

「これ、知ってる？」

「火打石だろうが。あんたの爺さんから貰ったやつだろ」

妻は、先祖代々下町生まれの江戸っ子だ。田舎生まれの私とは、どこか感性が違うのだ。雑でサツパリし過ぎて、良くわからないこともあった。

「ちよつと、向こうを向きなさいよ」

「・・・変だよ、火消しに行くんじゃないよ」

「ご先祖様からの感謝のしるし・・・でしょッ」

「あんな、今日は五十嵐と会うから、飯いらさないからな」

「えーっ、ご馳走準備しようと思ったのにー」

「アッ、そうだ。その火打石、お祝いで俺にくれよ。他いらさないからさ」

「・・・」

妻のご馳走は大体想像が付く、着付け教室で頭が一杯だろうと早々にあきらめている。一人息子は、外人と結婚後カナダに永住していて、『老後の面倒は、俺が見るから』とは言うが、二人共期待していないし、カナダに移住するつもりもない。だから、妻の教室も張り合いがあつて良いと、私は思っているのだ。

ただ、退職後私の居場所があるのか、それだけが心配の種だった。

退職後の計画をあれ以来、思い悩み調査もしてみたが、やはり最初の相談事は五十嵐以外にないと決めていた。

その日、退職の挨拶の後、花束やらプレゼントなど貰ったが失礼のないようにお断りをして会社を出た。数十年勤めたにしても、不思議と未練も何もなく実にあっさりしたものだ。むしろ、その後、五十嵐に退職後の計画を話す方が楽しみだった。

待ち合わせ場所は、いつものせんべろ居酒屋にした。

「おう、退職祝いどうだった？」

「サツサと、逃げてきたよ」

「良くあるパターンで、部下が泣いたりしたんじゃないの」

「んなわけないよ。やっぱり機械の一部だったのさ」

「で、どうよ。ひょうたんクラブ」

「ひょうたんもいいけど、ちよつとした計画があるんだ」

「・・・何よ、それ」

私は、ネットで集めたファイルを出して、

「これが移住者を募集している地域だけど、まだどこにするか決めてない」と、言っ  
て募集ファイルを開いて見せた。

「エエーッ、移住って、何よ。奥さんと行くわけ？」

「いや、一人で行く」

「移住なんだから観光じゃないだろ、ズーッと、住むわけ？」

「まあ、そうかな」

「まあ、そうかなって、別居するの？」

「そういう言い方もできる」

「本気かよ・・・」

私は受験生の頃、島唄を聞いて南の島に憧れた話をした。

何に魅かれ、何を思い立ったかわからないが、ネット検索していると南の島ばかりが目  
に付いて、集めた情報をファイルにして見たら自然とそうなっていた。と話した。

「アッ、本当だ。小っちゃい島ばっかりじゃね・・・それも遠いし・・・」

「小さいからいいのさ。海辺に、ばかでかいリゾートホテルなんかあったら、興奮めす  
るだろうが。観光客の来ない静かなところを選抜した」

「選抜するのはかっただから、マツいいよ。で、奥さんは何て言ったの？」

「まだ話していない」

「えっ、移住も？」

「なんも」



「なんもって、スーさん、それはダメでしょう・・・あれッ！喧嘩した？」

「しないよ。これもらった」

「なに？・・・火打石じゃね」

「もう、十日間の体験移住に予約したし、こいつで火をおこすのできたら、そこに決めるよと思ってるんだ」

「ハハハッ、冒険ダン吉じゃあるまいし・・・」

「冒険ダン吉さ。ロビンソン狂いそう。とも言うかな？・・・」

「冗談やめろよ。生活あるでしょうが・・・生活どうすんのさ？」

私はファイルをめくって体験移住するM島の条件を話した。自慢の第一候補だ。それは平屋の古い戸建て住居と五〇〇坪の土地で、家賃は月三万円と年に一万円。古井戸は自費で直せば使えるし、ガスは、ミニのプロパンボンベで充分だ。海までは一キロもない。家から海も見渡せて絶景この上なし。更に、嬉しいことに、海辺には作業小屋があつて、そこにも住もうと思えば住めると説明した。ただ、電気はない。それを引くとかなりの費用がいると言った。

「電気ない？どうすんの」

「太陽光発電でしょうが・・・電気代なし、水道代なしだろ、ガスなんかいくらも使わな  
いよ・・・まず、向こうへ行ったら、炭焼き小屋を作ろうと思うんだ。流木、竹、間伐材、  
なんでも使つて炭作りをするのさ。だから、火打石を使うのよ」

「かなり具体的じゃねえ。電気？水道？ガス？じゃねえ、炭か・・・収入無いから、税金  
もないってか・・・乏しい年金でもやれそう？」

「いや、5キロほど行くと、農業法人があつてアルバイトもできそうなんだ」

「なに？それ、いいね！・・・んで、どんなことすんの？」

「役場の人からは、主にマンゴウ栽培の雑用って聞いてるけどね。詳しくは知らん」

「んーにや、充分詳しい・・・フーン、なるほどねー・・・他に条件あるんでしょ、詳しい  
んだから」

「えーっとね、そこを借りる条件は、最低五年は暮さないとダメだそうだ。十年住めば、  
土地も家も自分の財産になるらしい・・・」

「・・・それだけ？」

「そう、それだけ」

「・・・」

「どうよ・・・マツ、イカちゃんに止められても、俺は行くけどね」

「・・・いや、いいよ。ん、いい!」

「どこが?・・・」

「俺も行く!」

「ハア?・・・」

「五〇〇坪の荒畑は魅力じゃねー、いいよ。俺も行くよ」

「冗談だろ。五年移住の覚悟ないと・・・」

「ある!十年以上ある」

「まさか・・・ひょうたんクラブは、どうすんのよ?」

「ひょうたんは、五〇〇坪で作る」

「あのなー、ここは俺の・・・何だよ!そのすぐるような目はー?」

「家賃は半分出す。土地は二五〇坪でいい」

「かってに具体的に決めんなよ。俺はイヤだね。イカちゃんと一緒に住んだら喧嘩になるよ」

「俺も、そう思う。だから俺は海辺の作業小屋に住むよ・・・」

「・・・」

「いいじゃねー、そんな顔すんなよ」

「・・・コンビニないぞ」

「いらねえよ・・・俺とスーさんの仲だもさー。いいだろ?・・・実はなー・・・」

五十嵐は四年前に奥さんと離婚したことを打ち明けた。

奥さんとは若い時からそりが悪く、何かと意見が合わなかった。彼の退職前に、出戻りして来た一人娘と孫と住むようになる、それが要因で喧嘩ばかりしていた。そして、退職を期に話し合って離婚することになったと話した。彼は、ローンで買った家と退職金の半分と年金の半割を奥さんと娘に与えて、今は一人アパートで暮らしている。働き口を探してみたが元役人では潰しも効かず、見つからなかったと言った。

「いろいろ、あるなー」

「ああ、良くある話さ。もう少し何とかなかったかなあー。と、後悔もするけど過ぎたことだしね」

「なんだよ、ずい分サツパリしてんじやねえ・・・うちの息子もカナダに永住だし・・・アレツ?・・・俺が息子の血を引いた?」

二人は馬車馬のように働いてきたけど、手に入れたのは建売りの安っぽい家と、僅かの老後の蓄えだけだったのか。慰みだった子供も成長すれば親の意図する場所から離れていく。自分の伴侶でさえも、知らない処から来て出会い、知らない処へと別れていくのかもしれない。

「一人になると意外と寂しいもんで、最初はアパートに帰るのも惨めな思いさ。それで、何もしないとおかしくなりそうで市民大学に入ったのさ。今更変だけど、地域の歴史や民芸や自然保護など学ぶうちに、楽しくなって、偶然だけどひょうたんクラブを選んだ・・・手慰みに作ってみると面白いんだ。まるつきし、別世界の生き甲斐なんだな。それで、すっかり変わった・・・スーさん、これ見てよ」

彼はスマホを出して、写真を見せた。ひょうたんを加工したランプシェードだ。デザインも様々あつて洒落ている。着色された模様も中々いいのだ。

「これ、イカちゃんが作ったの？」

「そうさ。マラカスや人形や、おもちゃ風のマンドリンみたいなものも作ったよ・・・でも、売れ筋はランプシェードかな」

「エッ、販売してるの？」

「そうだよ。インターネット販売で、少しは売れるようになって助かっているよ。年金だけじゃ大変さね。退職金の目減りも大分なくなった」

「・・・見かけによらんな」

彼は、ひょうたんは自作でなく購入するから利益も少ない。そこで、一坪農園を借りてひょうたんを植えた。しかし、初心者だし作付経験もないから出来も良くなかったらしい。いろいろ品種も変えて挑戦したけど、そもそも都市近郊の環境では難しいと話した。また、同様に物価も高過ぎて半割年金ではこの先暮らせないと危惧していたから、いずれ条件の見合う土地を見つけて移住しようと考えていた。まったく偶然だが、私のM島の条件はひょうたん作りにピッタリだと言った。

熱く語る彼に冗談の表情は無く、むしろ真に迫るものがあった。

確かにM島は、ひょうたん作りに適しているのかもしれないし、私は彼のランプシェードにも感心していた。また、荒畑の開拓も空き家の修繕も、二人で手分けしてやれば助かるだろう。それに、家賃の半減も大いに魅力的だ。

「ナッ！いいだろ？」

「・・・しょうがねえー。ほだらば、おめ様も行くべか！」

「データツ。スーさんの会津弁」

どうしてこうなるのだろう。五十嵐の方が私の3倍くらい意欲的で楽しそうだ。二人は学生時代に戻ったかのように、島での生活のことをあれこれ想像しては意見し合った。まるで、無謀な一人旅、否、今度は二人旅になりそうだ。

「俺達、パピヨンみたいだな」

「俺がステイブマックイーンで、イカちゃんが、ダスティンホフマンか？」

「そんなのどっちでもいいよ。この東京から島流しになるのさ」

「ああ、競争社会からの脱獄だ。ただし、喜んで」

「ロビンソン狂いそう・アハハ」

私達はすっかり学生時代に戻っていた。酔うほどに島での生活が待ち遠しく楽しくなっていく。私は、炭をうまく作れるようになったら、マンゴウ栽培を勉強して、他にも果物や野菜を作ろうと思った。ひょうたんなんかに負けてたまるかと対抗意識を燃やしていた。自分の意思で他人に何か魅力を与える物を作りたい。今は何の知識も技術もないが、その事にだけに気持ちを持ち続けられるのなら、できると思った。

長い年月の間、あの島唄を聞くことはなかった。何という曲なのかもわからない。探そうとも思わなかった。どんなリズムだったのかさえ忘れてしまって、口ずさむこともできないが、原始な心が、神秘的何かに酔いながら舞い踊っていた。その情景だけは憶えている。もし今、あの唄が流れたとしたら、もっと鮮明に思い出すだろう。ようやく私は行けるのだと思った。

私は家に帰って、妻にそのことを話した。

すると妻は、

「どうせ、私が反対しても、あなたは行くんでしょう？・・・」と、言った。

それに続いて言葉はでない。さすがだ。我妻はサツパリし過ぎている。

「・・・まあ、ね」

私は生返事をして、思った。

『いずれ歳とって着付けの生徒も来なくなれば、楽園の島に、お前も来るだろうよ』  
気まずい空気の中でお互いの目が合ったら、妻は哀れむような不敵な笑みを浮かべていた。

『どうせ、一人暮らしに飽きがきたら、また戻って来るんでしょうね』

妻の目は、そう言っている。